

つながるの昔っこ29 (昔話)

律軽のひげ殿様①

(律軽弁)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

津軽の殿様し、初代は誰でもおべでるべ。

んだ、為信（ためのぶ）様だ。

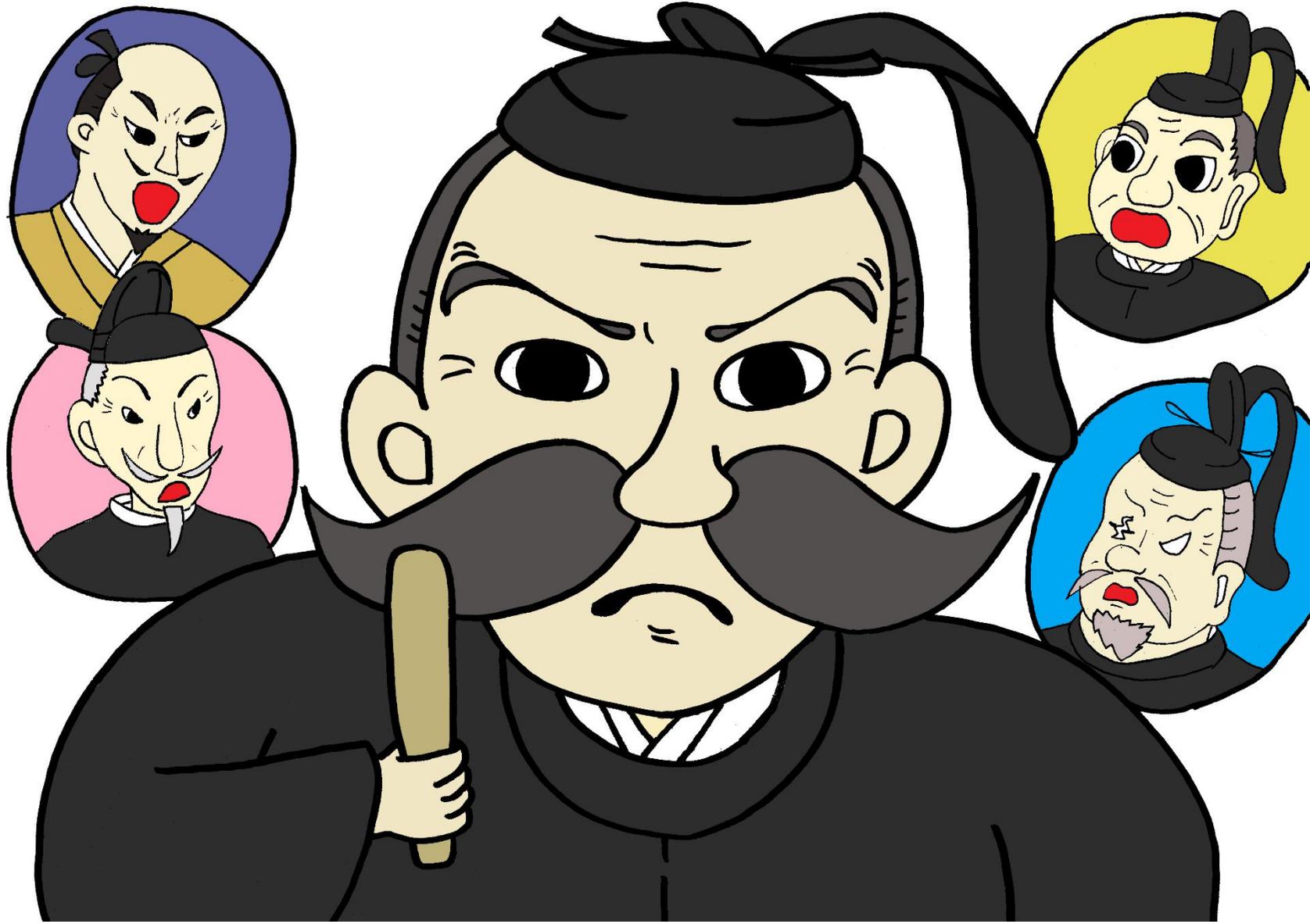
二代は信牧（のぶひら）様、三代信義（のぶよし）様、四代信政（のぶまさ）様、五代信寿（のぶひさ）様、六代信著（のぶあき）様、七代信寧（のぶやす）様、八代信明（のぶはる）様、九代寧親（やすちか）様、十代信順（のぶゆき）様、十一代順承（よりつぐ）様、十二代承昭（つぐあき）様、十三代英麿（ふさまろ）様、十四代義孝（よしたか）様・・・てすんだ。

昔、今から百八十年前の話だ。

九代の殿様の寧親（やすちか）公は立派だひげはやしてあったとごで、天下の大名達から「津軽のひげ殿様」て呼ばれであったずおん。

そして又、この殿様、なもかも情張り（じょっぱり）であたごで「津軽の情張り殿様」ても呼ばれであたど。

剛情で、人に負けるの大嫌いだ殿様であったんだど。



ある時、江戸の将軍様のお城に諸大名が集まった時に、秋田藩の殿様 佐竹様が、国許（くにもと）から届いた大ただ（でただ）落（ふぎ）とば将軍様さ献上したど。
その落（ふぎ）あ、何も彼も（なもかも）見事だ落（ふぎ）であたどこで、大名達もみんなほめだど。

そごさ津軽の情張り殿様 寧親（やすちか）公も居でし、その佐竹公献上の落見でも何もほめねで「えへらえへら」て笑ってらど。



それば見だ將軍様『津輕公、何おがしんだ？』て聞いたどこで
『あれくらいの落（ふぎ）だば、津輕さ行げば鎌で刈るほどございます』て言（し）たど。

將軍様、それば聞いて、又（まんだ）、津輕の情張り始まったなと思て
『よおし、津輕公。それならば、百日の間にこれよりもっと立派な落（ふぎ）を献上せよ。
もし出来なければ、切腹を申しつけるぞ』
て、きつくしゃべたど。

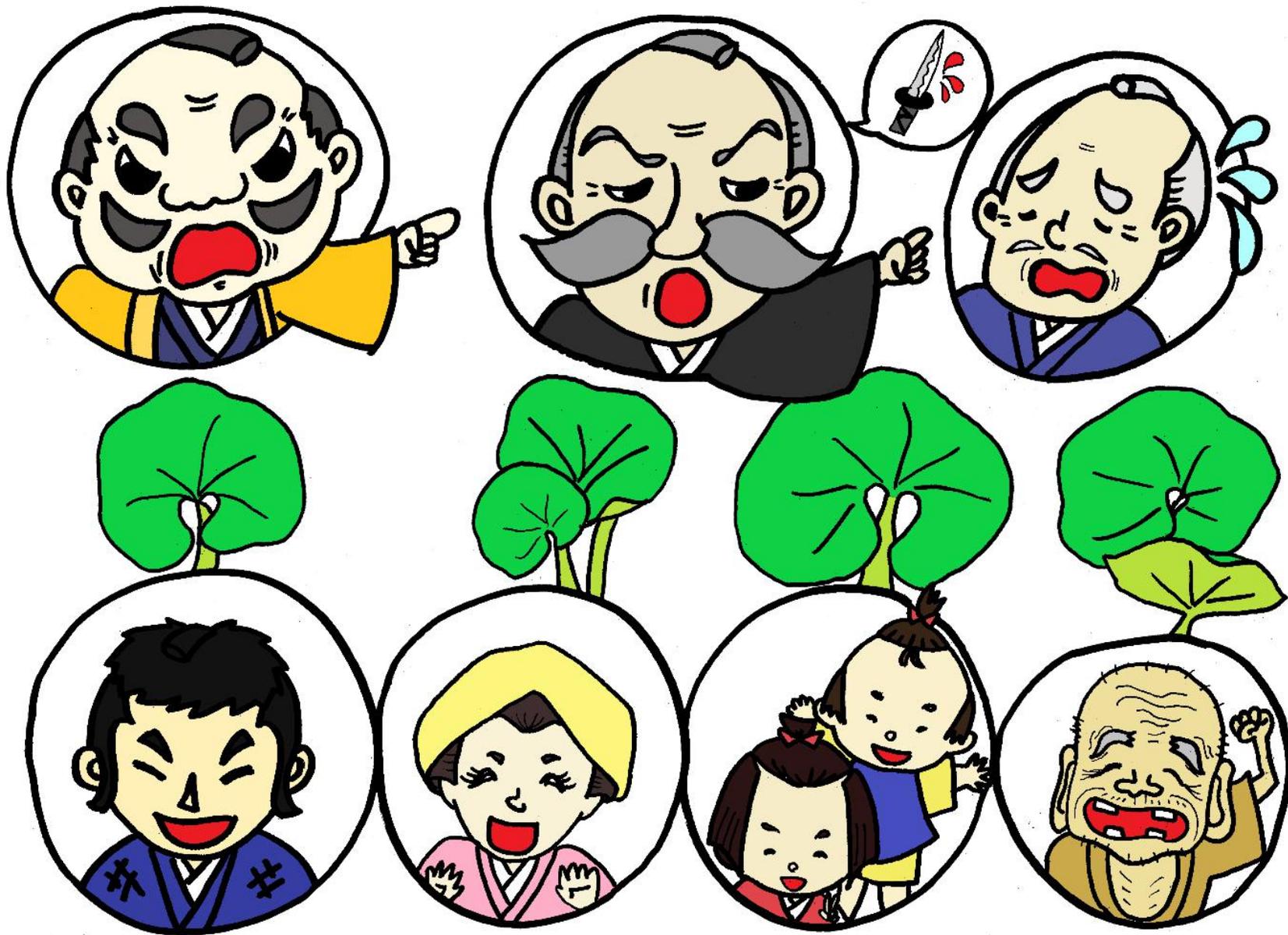
津輕の殿様、『承知仕り（つかまつり）ました』て言（し）て、すんぐ江戸から津輕さ早
馬飛ばして、大（で）っただ落（ふぎ）探へて言（し）たど。
殿様、家来達さ『もし、この落（ふぎ）見つからねば津輕家は断絶じゃ。そのつもりで、
みっちどかがって探すように・・・』と命じました。

さあ、大変だ事ねなた。

国許（くにもと）の家来達あ、うるふるめで、落（ふぎ）探しに歩（あさ）いたど。

領内のさむらいずさむらい、百姓ず百姓。

男（おどこ）も女（おなご）も、子供達（わらはど）がら、よたらよたらずジコババまで、みんなして山だの沢だのさ入（は）て落（ふぎ）ば探したずおんな。



どうしても見つからぬ。

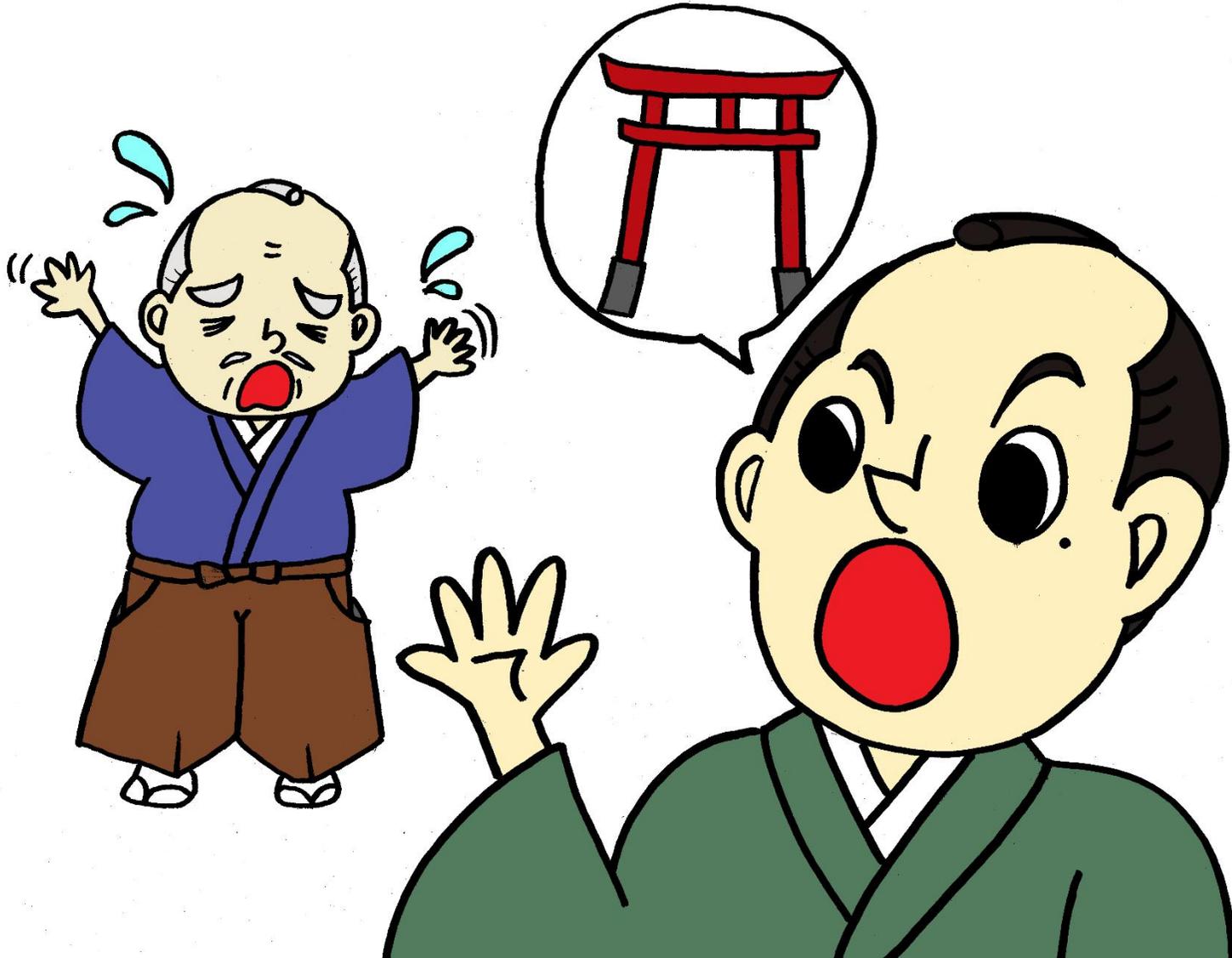
約束の日もだーんだん近（ちけ）ぐなって来たど。

家老も家来衆も、今は困ってまで、

『どっすべなあ、どへばいいべなあ』てしてらばて、どっす事も出来ねえ。

したきゃ、一人の家来が家老さ

『こした時、津軽ば代々守ってけでる、赤倉様さお願いしてみればどんですべ』て言（し）たど。



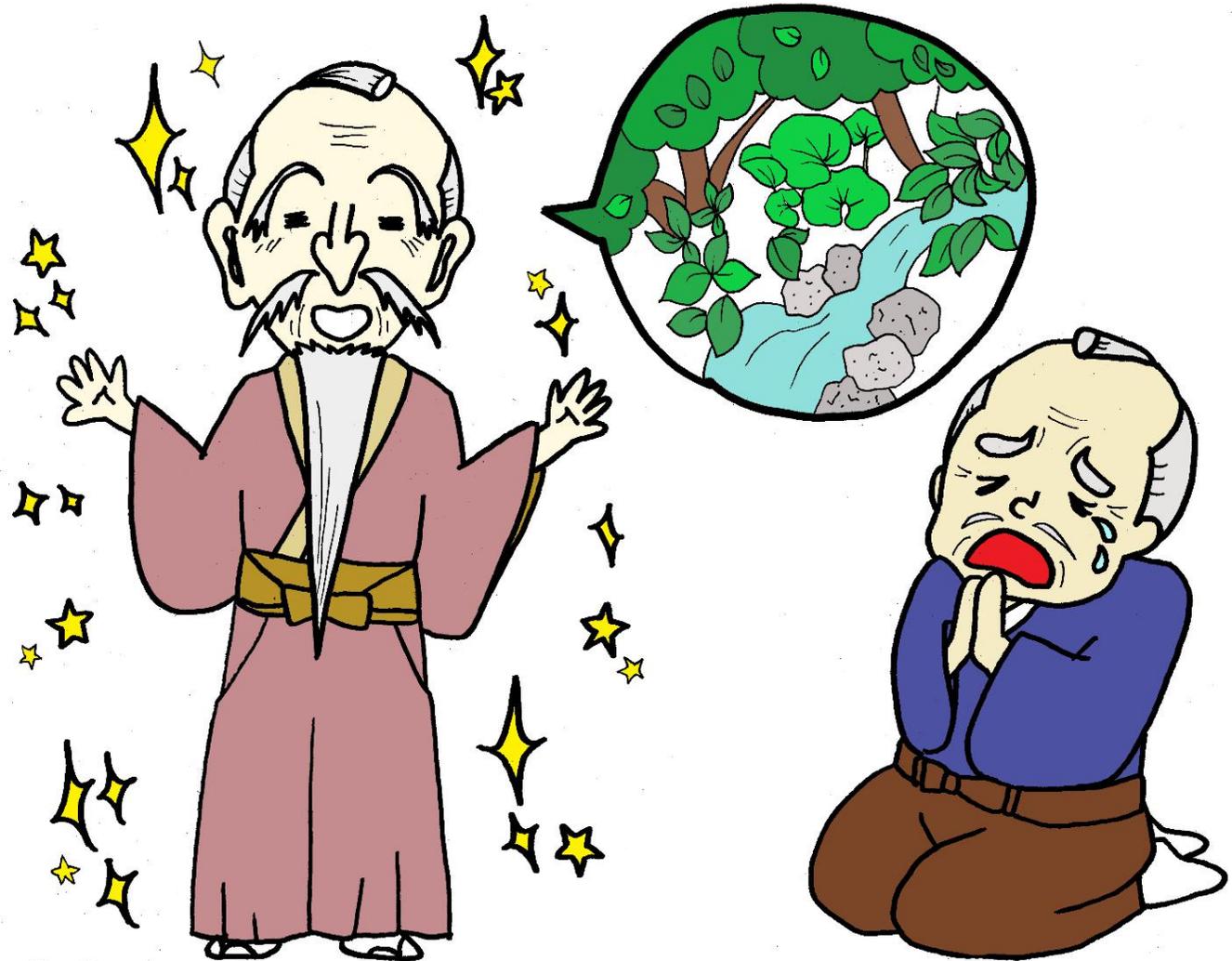
そこで皆して赤倉様さ行って、一生懸命、一生懸命、お祈りしたど。

そうしてるうちに、とうとう満願の日来た。

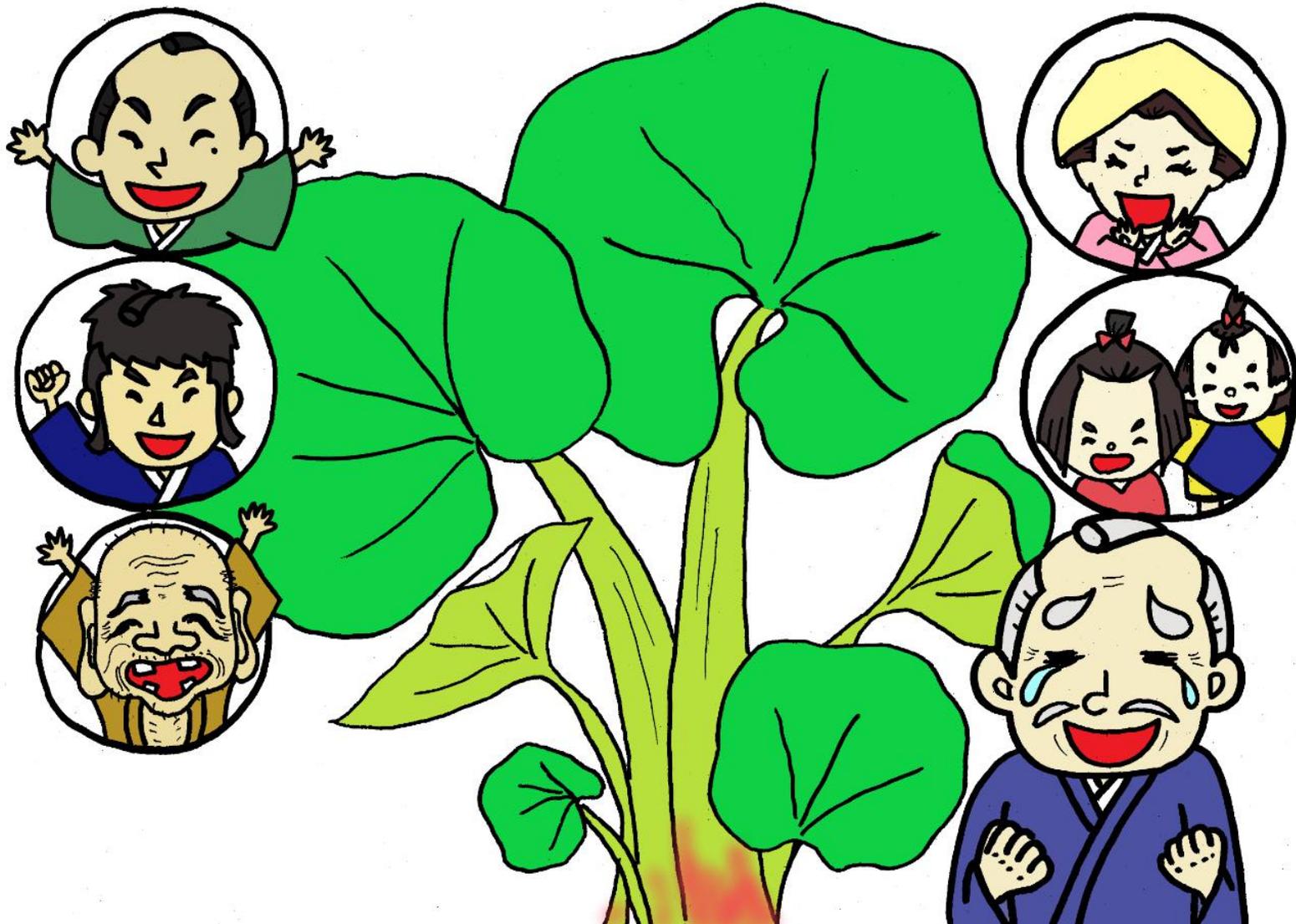
家老様、お堂の中で必死になって拝んでらきや、目の前さ、スーッと白い着物着て、長えひげ垂らした、おこれえ爺様（じさま）立ったど。

赤倉様であた。

『このたびの、津軽の難儀を見捨てるわけにいかぬによって、赤倉沢の中腹に、踏（ふぎ）を植えておいたから、明日、行ってみるがよい』て言たきや、スーッと消えだど。



家来達あよろこんで、さっそく赤倉沢さ探しに行ったど。
したきやあ、そごさ、落（ふぎ）ズツパど生（お）がてら所（どご）あって、その中さ、特に
見事だ大ったらだ落、二本あてあたど。
んにや、それあまだ、何も彼も（なもかも）大つきい落（ふぎ）であったんだど。
さあ、家老は大急ぎで、特別に作った長持ちさ、根つけだまんまの大落（ふぎ）入れて、江戸
まで運ばへだど。



それあ、ちよんど九十九日目に江戸さ着ぎ、将軍様さ献上されだずおん。
これ見だ将軍様、呆れるんだがさ、よろこぶんだがさ、『津軽の落（ふき）はいちだんと見事
じゃ』てほめだど。



実は、津軽寧親（やすちか）公、何ぼ待っても待っても、落（ふぎ）届かねどこで、内心ハラハラしてあた。

『あんまりホラ吹いだり、情張り張らねばいだったなあ。我（わ）の情張り（じよっぱり）のおかげで、今、国許（くにもと）沙汰（さだ）だ事になってらべな』

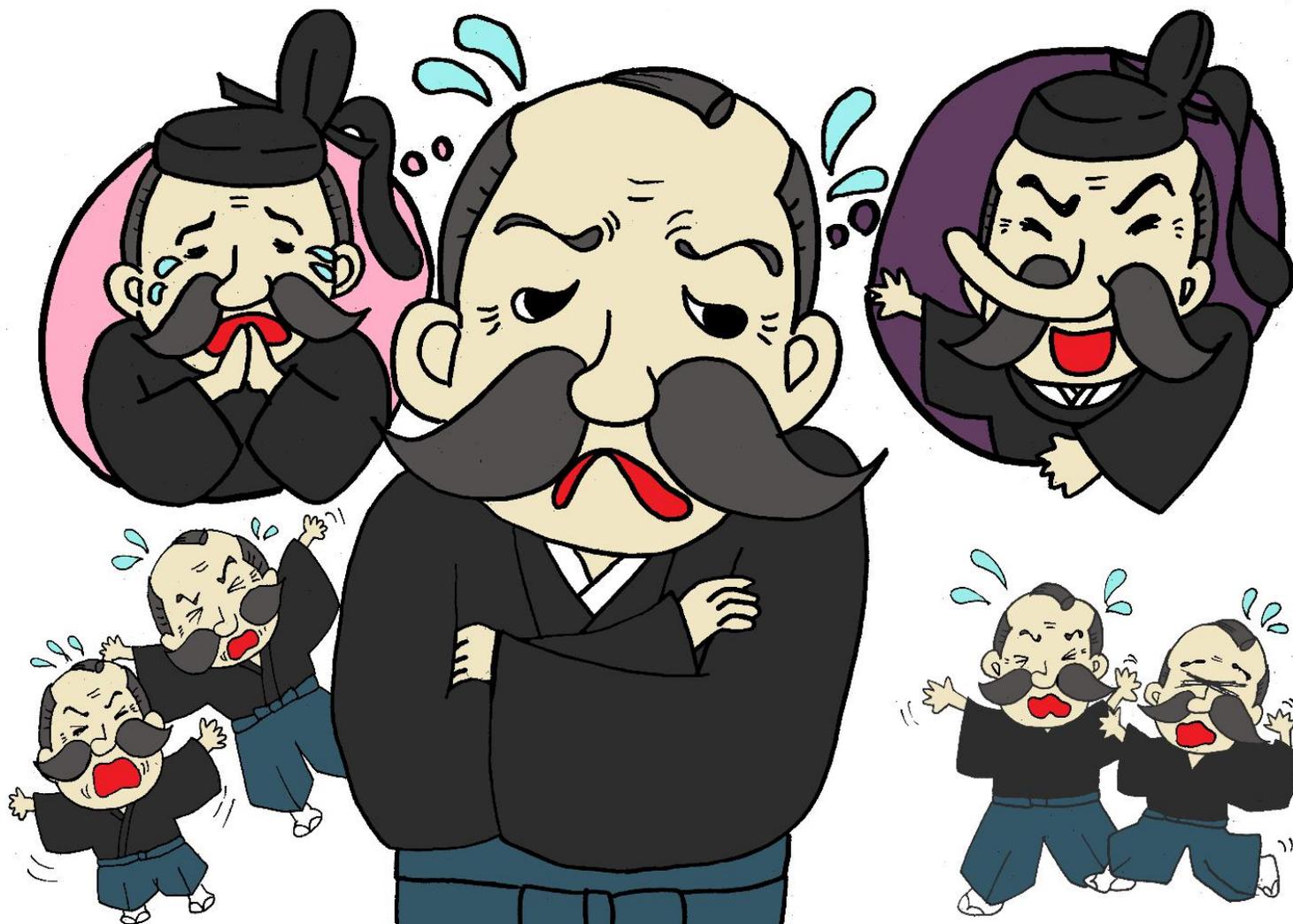
と後悔したけど、どっすもならね。

七十日過ぎ、八十日過ぎ、九十日過ぎだ。

『ああ、これで津軽もおしまいだべが。

我（わ）も、もう少しで腹切らねばまいね。

皆の者、許せよ・・・』



そしてらきや、あど一日だけ残して、大落（ふぎ）届いた。

将軍様からもおほめの言葉いただいた津軽公

『なあに、このぐらいのもの・・・』て言いかけで、うって、天井見上げだど。
津軽の殿様の眼（まなぐ）コさキラキラと光てるものあったど。

